

戦後思潮考究「序説」(三)

中 島 甲 臣

本稿は筆者の同名のシリーズの第三稿である。考察の基本的態度は前稿及び前々稿と同じである。

承前

前稿は「筆者は……戦後思潮の一部に就いて疑義を持ち続けてきた」との書き出しから始まった。以下、基本的態度の提示として、前稿冒頭の「要旨」を再録する。

望ましいことなのか、そうでないのかの価値判断は抜きにして、世界中の全ての国は、夫々自国の国益に従って行動している。普通個人間の道德として規範と成っている正義人道などというものは、そこに「程度」の問題が存在す

ことは言うまでもないが、その規範には成ってない。

戦争に於ては、多くの場合、勝者は敗者を裁く。上記の論旨を承認すれば、勝者が敗者に説く「正義人道」がおよそ何者であるかは改めて言うまでもあるまい。我々は長い間「正義人道」とは関係の無い「勝者」の説く「正義人道」を聞かされてきたことになる。筆者は、長い時間を掛けて、遅ればせながら、以上のことを「自覚」した。

この様に考えて来れば「戦後思潮の一部に就いて違和感を持ち続けてきた」の理由も自ずから明らかになる。筆者は別に「戦後体制」は全て否定すべきなどと考えているのではない。「戦後体制は全て善である」と考えるのは止めよう、何が善であり、何が悪であるかは我々が判定しようと主張しているのである。

~~~~~  
今回は西力東漸に接触して以来の、アジア東部における我国の「責任」を「安定勢力」との関連で考察する。これは「戦後思潮」への疑義の提示でもある。

我国にとって、十八世紀末以来、他国との戦争、紛争等の「衝突」が行われたアジアの(北)東部、則ち旧ソ連の沿海州、樺太、千島、旧満州、朝鮮半島、北支那、台湾、中国本土の、国家間の関係の安定度に就いて考えてみる。

この地域には現在、我国を含めて五つの国家と一つの地域(準国家)が存在している。処で、この六つの国家、準国家の範囲内での二国間関係は十五通りあるわけだが、「戦後」ほぼ五十年近くの間、冷戦下の重苦しい状態の下ではあったが、これらの諸国間の「関係」で、実際に砲火を交える迄に至ったのは、朝鮮戦争、ダマンスキー島事件、

金門島と対岸との「砲戦」の三通りだけであり、朝鮮戦争での中国と韓国を数えても四通りである。(アメリカの関与は論旨の関係で今の処、意識的に排除してある。また地域を今の処アジアの(北)東部に限っているのでベトナム、カンボチアを含む東南アジアも除外してある。)この間、我国も戦禍に巻き込まれることはなく、総体的には「平和」であつたと言つてよい。

平成五年一月一日付けの朝日新聞に

『世界の主な民族紛争・対立地図(資料…アンドルー・ボイド「世界紛争地図」、外務省などによる)』

が二頁の見開きで掲載されていた。「民族紛争」というテーマによるのかクロアチア等という国名、インディアン等という事項名、ゴラン高原等という地域名などが項目となっており、項目は必ずしも国名に限らないが、それらが七十三、「紛争・対立」の事項としては、分離・独立・帰属替え要求Ⅱ三十三、領土をめぐる紛争・対立Ⅱ十五、主導権争いⅡ十四、宗教対立Ⅱ十三、武力衝突Ⅱ十六、テロ、ゲリラ・暴動などⅡ十五、PKO展開地域Ⅱ十三、先住民族問題Ⅱ九の計Ⅱ一三四が地図と共に示されている。

平成五年の現時点に立つてみても、世界全体を見れば、ある意味では物情騒然、現実に各所で戦争、紛争が起きている。

これに対し、前記のアジアの(北)東部には、先住民族問題としてニブヒ(ロシア)、アイヌ(日本)、領土をめぐる紛争・対立として北方領土(日本・ロシア)の三事項が挙げられているに過ぎず、これを、例えば、旧ユーゴスラ

ピア関係の、分離・独立・帰属替え要求Ⅱ四、領土をめぐる紛争・対立Ⅱ一、宗教対立Ⅱ三、武力衝突Ⅱ一、PKO展開地域Ⅱ二の計Ⅱ十一に比較しても、如何に平和であるかが分かる。

このような平和な状態しか知らぬものにとつては、何故、日本が、同じ地域で、十九世紀後半からつい五十年前まで日清、日露戦争、満州事変、支那事変を含め殆ど常に動乱に明け暮れていたのか不審に思われるであろう。上記のアジア東北部で、朝鮮戦争を除き、平和が続いているのは、日本が「侵略」をやめたからで、日本が平和の破壊者として糾弾されるのも当然である、と感ずるかも知れない(この様な考え方が当方の言う「戦後思潮」の一つである)。

しかし事情は然く単純ではない。

一定の地域に安定が続くのは、その地域に存立する諸国家の「倫理的善意」等とは関係なく、殆どが、その地域の安定勢力の存否に依存する。先に述べたように、「現在」アジア東北部で「平和」が続いたのは、アメリカが安定勢力になっているから、または、なっていたからである。仮に、この地域の任意の二国が、あるいは一国が一方的に他国に、「戦争」開始を決意する際は、何よりもその時アメリカはどう出るかを配慮するであろう。朝鮮戦争の場合は、その勃発前にアチソン國務長官の、韓国はアメリカの防衛線の外という言明もあり(その場合、北海道も防衛線の外ということになっていた)、アメリカの朝鮮半島からの撤退の「可能性」もあった。則ち安定勢力としてのアメリカに疑義を持ち得るような状態であった。多分これが朝鮮戦争発生のかかなりのウェイトを占めていたと思われる。

余り仮想的で、実感が湧き難いかも知れぬが、上記のほぼ五十年近くの間、アメリカがこの地区の紛争、戦争に一

切関与しないというような状況を想定して見ればどうであろうか、その場合「平和」は続いて居たであろうか。

安定勢力は、文字通り、その地域に安定を齎らすので、その意味ではプラスのイメージを持つ。しかし、多くの事象がそうであるように、此処にもメリット、デメリットの両面がある。「安定」の蔭には、程度の差はあるにしても、周辺地域に対しての威圧、自由の圧殺があることも忘れてはならない。

また、当然ながら安定勢力はその周辺に多くの影響を与える。その膨張期は上記の「圧伏」が顕著に現われて來るが、衰退期には、その「支配」地域、特にその「周辺地域」に変動・動揺が起こり、場合によっては、それらは戦乱に巻き込まれる。これもまた「周辺諸国」の意志とは無関係な、半ば物理的必然と言ってもよい。このことは「歴史的真理」として実証されているように見受けられる。十九世紀中葉のオスマン・トルコの衰退と黒海周辺を含めてのバルカン半島の変動・動揺、クリミア戦争、露・土戦争とそれに関連する西欧列強の動き等はその例である。最近の旧ソ連の衰退、解体に続く旧ソ連を構成していた「周辺諸国」間の悲惨な内戦は上記の「歴史的真理」を実証して居るかに見える。またイラクのクエート侵入、旧ユーゴ・スラビアの惨状も安定勢力としての旧ソ連の衰退、解体と無関係ではあるまい。この様な例として二十世紀初頭のオーストリア・ハンガリー帝国の衰退と第一次欧州大戦の勃発も挙げる事が出来るかも知れない。

東部アジアでは、古代より、中国が、その地理的、人的、文化的条件から当然安定勢力となっていた。超大国であつ

た漢の滅亡後の五胡十六国時代、同じく唐の滅亡後の五代十国時代には、上記の「歴史的真理」は適用できるであろう。我国も、東夷の蔑称が示すとおり、大局的にみればアジア東部の周辺国である。島国であるとともに、辺陲に位置した為に、西域や越南の様な直接的影響は少なかったが、当然安定勢力の盛衰の影響を受ける。

漸くにして、「本論」に接続できるようになった。

幕末、十九世紀、我国が直面したのは、安定勢力「清国」衰退と、その余波である。時代の進展とともに、海は防壁ではなく、便利な通路になっていた。島国であった利点は消え、直接的影響を受けるようになっていた。

筆者が先に触れた『我国にとって十八世紀末以来、他国との戦争、紛争等の「衝突」が行われたアジアの（北）東部』は樺太、千島、朝鮮半島を除き全て清国の版図、または版図であった地域、であることに注目すべきである。

行論の都合上、周知であろうが、「教科書」的記述を行う。「」は日本関係。

対ロシアのネルチンスク条約（一六八九）、キャフタ条約（一七二七）は一応別とする。「十八世紀末エトロフ、クナシリ、ウルツプ、樺太大泊りなどでの藩幕制下の「日本」とロシアの紛争」、一七九六白連教徒の乱、一八四〇〜一八四二阿片戦争、一八四二南京条約・イギリス香港領有、一八四三イギリス清国より治外法権獲得、一八四四フランス、アメリカ、イギリスに同調、一八五六アロー号事件、一八五一〜一八六四太平天国の乱、「一八五三ペリー来朝」、一八五八アイグン条約・アムール川以北のロシアへの割譲、一八六〇北京条約・沿海州のロシアへの割譲、「一八六八明治維新」、一八八一イリ条約・新疆でロシアの優位、一八八四〜一八八五清仏戦争、一八九一ロシアシベリア鉄道着

工、一八九三フランス領インドシナの成立、「一八九四―一八九五清戦争」、一八九五三国干渉、一八九六ロシア東清鉄道敷設権獲得、一八九八ドイツ膠州湾租借、ロシア遼東半島南部租借、イギリス威海衛・九竜半島租借、一八九九フランス広州湾租借、一八九九ジョン・ヘイ中国の門戸解放宣言、一九〇〇北清事件・義和団事件、「一九〇二日英同盟」、「一九〇四―一九〇五日露戦争」、「一九〇六満鉄設立」  
そこに見られるのは内憂外患覆うべくもない清国の衰退である。

筆者は、子供の時以来、永い間、日露戦争が、「赤い夕陽の満州」で行われたことに何の違和感も持っていなかった。それは何か自然現象のように当然のことと受け取っていた。しかし考えてみれば奇妙である。日露戦争は日本の領土でもなくロシアの領土でもない朝鮮半島北西部と満州南部で行われたのだ。事情が甚だしく異なる遠い古代は知らず、近世以降、二つの国が当事者二国以外の土地で国運を堵して戦った例はないだろう。満州は清国の領土である。自国の領土内で隣接する二国が戦うのを清国（民）はどの様に感じていたのだろう。

歴史に「もしも」はないと言われるが、「もし」、満州が清国によって保全されていたら、日露戦争はあったろうか。

日露戦争は「存在したかも知れない清露戦争」の代理戦争の面も持っている。西力東漸の矢面に立ち、それを挫く、という、それまで誰もなし得なかった役割を果たした。このことは同じく、アジア東部の辺境であるインドシナ半島への西力東漸（この地区の事項はいままでこの稿で触れて来なかった）と比較してみれば明瞭である。この場合の西

力はフランスである。この地の支配権をめぐる清仏の角逐は、清仏戦争（一八八四―一八八五）の結果フランスの勝利に帰し、最終的には（一八九三）越南・カンボジア・コーチシナ・ラオスよりなるフランス領インドシナが成立している（日清戦争一年前）。この場合は清が実際に西力と戦い、敗れ、清に代わって西力東漸に刃向かい代理戦争を行う国もなかった。我国が、先に述べた様に、十九世紀中半頃までは西方や南方からの圧力には『島国であるとともに、辺陲に位置したためた為に、西域や越南の様な直接的影響は少なかった』かもしれぬが、明治維新を遂行した活力を無視しては語れまい。

さて、「仮想的清露戦争」に清国が勝っていた場合は勿論清国は安定勢力の立場を保持しているのだから、筆者が先に触れた、清国による『周辺地域に対しての威圧、自由の圧殺』は当然存在しただろう。日清戦争以前の二八八六年（明治十九年）清国北洋艦隊の主力艦四隻が長崎に入港し（勿論合法的に）、上陸した清国水兵の一部が暴行、取締りの日本警察と衝突、双方死傷者八十余名という「長崎水兵事件」が起こっている。これに対して、その後の日本の中国に取った態度は、この様な些事とは比較にならないとの反論が予想される。それも尤であるが、強者は常に同様な態度を取る。清国が安定勢力であり続けたときは、これに象徴される状態が想定される。更にインドシナ半島の場合と比較すれば如何。ベトナムと「中華」の関係は制圧と反発の歴史ではなかったか。

さて、日露戦争の勝利は一見華やかではあったが、その後の日本の進展にとって「躓きの石」になったように思われる。アジア東部の周辺国である日本は、当時の清国が安定勢力であっても、なくても、結果としてはあまり「幸運」



に恵まれていなかったような気がする。これに就いては後述。此処では、当時の清国の持つべきであつた「役割」に就いて触れた。

日露戦争の結果は色々な意味で大きい。「世界史」にも影響を与えたが、それはさておき、「戦後」我国はロシアが満州に持つていた「權益」の一部を継承した。筆者は、現在から振り返って見て、此処に日本の「悲運」を見るような気がする。

悲運・と言うからには運命的であること、則ち選択の余地のない必然的現象であること意味する。と、同時に、悲運・と言うからには、それがやがて我国に「不幸」を齎したことを意味する。当時の我々の「先輩」のおかれていた状況、それに対する渾身の努力、その結果の勝利、及び「それら全体の結果」に対して、遙か後世からあれこれと言及するのには躊躇いも感じるが、後身として、その「結果」も甘受した世代としての考察である。

先に「悲運」と述べたように、この辺の事項の分析では、相互に矛盾する様な事態が、ある意味で肯定され、同時に、ある意味で否定される。これは、「事態」自身が矛盾を内蔵していると考えられるからである。文面に「しかし」という接続詞が続出し、何が肯定され、何が否定されているのかと矛盾を感じるかも知れぬが、その「事情」は上述の通りである。

我国が、「ロシアが満州に持っていた權益の一部を継承した」ことは当時の国際常識として必ずしも不自然ではない。しかし、他国の中にある種の権限を持つということは、その国に対する主権の侵害になることは間違いない。明治開国以来我国もそれに悩まされた。自国が悩まされたことを今度は他国に行った訳である。

しかし、一国が自国民の「血で贖った」權益を、敗戦による放棄（今次大戦後の日本はそのケース）以外に自己の意志によって放棄した例は、近代国家が成立し、国際間の関係が「国家」間の関係として把握されるようになった時期以後、多分あまりないであろう。昭和三十一年のハンガリー動乱でも、昭和四十四年のチェコスロバキアの「動乱」でもソ連は断固として自国の「權益」を守った。幻想に終わったプラハの春に止めを刺したのは「ソ連兵の血で贖った土地からは一步も退くことはできない」とのブレジネフの一言である（テレビ放映のドキュメンタリーにその様な「場面」があつたと記憶する）。近時の殆ど唯一の例は現に進行している旧東ドイツを含めての東欧からのソ連軍の撤退であるがこれも見方によつては、砲火こそ交えていないが「敗戦」の結果であると見てもよい。ロシアの現状から見て旧ソ連軍の「決起」の可能性は分らないが、多分「軍部」には、生活面ばかりでなく、自己のプライドに掛けて不満が蓄積しているだろう。この事態は現在進行中で、「結論」はまだ出ていないように思われる。

「權益の放棄」に就いて更に言えば、第二次世界大戦後の「列強」の植民地解放がある。これらは、敗戦によらざる自己の意志による放棄であるか。イギリス、フランス、オランダ等は一度はこの大戦中に敗れている！

日露戦争以後満州事変、支那事変に至るほぼ三十年に亘るアジア東部の情勢はまことに複雑である。

アジア東部の問題は、もはやその地域だけの問題ではなくなり、西欧列強の世界政策と密接に絡まって来る。そこに見られるのは、当然ながら中国の民族意識の高揚、一方その国内の混乱、欧州大戦、その影響、社会主義国家の成立、依然として軍閥を含む中国の近代国家としての未成熟、我国の資本主義成長過程に起因する我が国内の諸問題、列強（日本も含めて）の依然たる自国の権益への執着、中国統一国家形成への列強（日本も含めて）の消極的態度、これらは相互に関連を持ち複雑な様相を呈する。例えば帝政を目論む袁世凱にイギリスが肩入れをしたり、悪名高い日本のシベリア出兵が実はフランス、イギリスの要請によることなど。

この間の「事項」を「教科書」的年表でその大要を示せば次の通りである。

一八九八戊戌の政変、一九〇五孫文中国革命同盟結成、一九一一辛亥革命、一九一二中華民國成立、清朝滅亡、一九一四欧州大戦始まる、一九一四日本欧州大戦に参加、南洋群島占領、青島攻略、一九一五対華二十一個条約の提示、一九一七アメリカ欧州大戦に参戦、一九一七石井ランシング協定、一九一七ロシア革命、一九一八シベリア出兵、一九一八欧州大戦終る、一九一九ベルサイユ条約成立、一九二〇国際連盟発足、尼港事件、一九二一（二）ワシントン会議・四国条約・九国条約、日英同盟廃棄、一九二二中国共産党成立、一九二三ソビエト連邦の成立、排日移民法成立、一九二四第一次国共合作宣言、一九二六北伐の開始、一九二六蒋介石国民政府樹立、一九二八ソ連第一次五年計画、済南事件、一九二九世界恐慌、一九三〇ロンドン軍縮条約、一九三一満州事変、一九三七支那事変、等々。

北方からの圧力はロシアの敗退、革命により一時減少した。欧州大戦の影響で西欧列強に代わり日本の勢いもこれまた一時強まるが、やがてアメリカの台頭と衝突し始める。一時逼塞していた北方には強力な社会主義国家が成長し

始める。日露戦争以来及びその後の中国に対する我国の權益に対し当然民族意識に目覺めた中国からの反発がある。「国益追求」の列強は、当然それに同調してジャパン・バッシングを始める。ところがこの列強がまた中国に対し治外法權を維持し「租界」を保有している。情勢はまことに複雑である。

日本は中国に代わってアジア東部の「安定勢力」を志したのか。確かに日露戦争で「西力東漸」を阻止したが、それは独力でのことではなかった。ロシアとイギリスの世界的規模での対立のアジア版の一頁の感もある。日英同盟がそれを示している。アメリカもまた日本に好意的であつた。ポーツマスはアメリカの都市である。然るに今や米・英は「仮想敵国」になり掛かっている。非常に難しい状態である。

当時の日本の指導者は日本の「運命」に関してどの様なマスター・プランを持っていたのだろうか。多分明確にはなかつたのだろう。その後の国内の混乱がそれを示している。我国のみが極度に「良心的」になり「權益の放棄」による国運の打開も一つの選択枝としてありうる。「戦後思潮」の一部はこれを指向していたのかも知れない。戦前の日本の「侵略」を非難するならば、日本の取るべきであつた道を示さなければ、「人」を納得させることは出来ない。「權益を放棄」した場合、日本はどうなるか、いままで、筆者は、屢々「存在したかも知れない清露戦争」や、『安定勢力による周辺地域に対しての威圧、自由の圧殺』に言及してきたのは以上のような事柄が念頭にあつたからである。国運に言及するものは「責任」を持たねばならない。単なる放言は許されない。筆者はこのシリーズの二の冒頭で「春秋に義戦なし」に言及した。また端倪すべからざる列強の国策を見てきた。「權益を放棄」した場合、ひとり中国のみは君子の国である、とは思われない。正に行くも死、留まるも死、に近い。事実、満州事変後十年、「大東亜戦争」開

始前後の海軍首脳の発言にそれに近いものがある。それではそもそも始まりであった我国の「満州進出」、「我国のロシアの満州に対する権益の一部の継承」は誤りであったか。「戦後思潮」はこれに対して如何に答えるか。根こそぎの「権益の放棄」が如何に難しいことかは周知の通りである。筆者は、中国への「権益の拡大」↓満州事変↓支那事変↓今次大戦、と一直線に展開する以外に道はなかった、とは思わない。しかしそれでは、他にどのような道があったかと考えるのである。今次大戦に従軍したか、それに近かった若者も老いに入った。多分夫々の自分史に併せて日本の歩んで来た道を振り返らざるを得ない心境になってきただろう、その様な「本」が目につく。その場合殆ど判で押したように当時の「国策」の無謀さ、非科学性に言及している。こちらも同時代に生きたものとして、その指摘には共感する。が、では科学的（合理的）に対応した場合どのような様な対処の仕方があったかに触れるものは少ないように見受けられる。また、当時の指導的立場にあったもの「こうすれば良かった」との発言も多くあったが、実現しなかった「夢」は幾らでも描ける、その場合、「春秋に義戦なし」を考慮に入れるとき、その「案」によった場合、我国の運命は最終的にはどの様になっていたのか、そこまで思考実験して見ないことには単なるお話に留まる。さきに述べたように、国にも、どうにもならない運命があるような気がするがどうだろう。

満州は日本の生命線である。大興安嶺山脈を守れ！ というスローガンは、幼い日から、聞かされて来た。それらを全て「失った」今、日本は別に「死」んでも居ず、それどころではない、GNP世界二位を誇っている。曾つての状況を知るものにとっては、狐に摘まれたような不思議な感じがする。何故だろう。これも今まで屢々触れたように、

ある意味では皮肉な話だが、アメリカが安定勢力になったからである。そもそも満州への進出はロシアの南下の阻止にあった。それは後のソ連に変わっても同様である。冷戦の結果ソ連に対する抑止力はアメリカに変わった。満蒙は日本の生命線ではなくなった！ 思えばアメリカが他の自由主義諸国と連合して良くなし得たことを日本は独力で行うとした。その不可能なる哉、昭々として明らかなり！ 当時の我国が苦悩したのも当然である。此処で一言付け加える。この文では終始ロシアが我国の「仮想敵国」の様に取り扱われているが、別に他意あつてしているのではない、西欧列強の中、我国と「国境」を接しているのはロシアのみである。またロシアの「領土拡張」は過去に十分に「実績」がある。また現実我国を征服する可能性のあつた国である。我国の「参謀本部」は片時もそれを忘れたことはないまい。対口警戒心が国策の基礎にあつても不思議ではない。しかし同時にアメリカもまた日本と戦つた国である。筆者は先に『ひとり中国のみは君子の国である、とは思われない』と述べた。アメリカも同じである。無条件で我国を守ってくれる筈がない。覚めた見方をすれば、冷戦の結果、偶々「国益」の一致の度合が多かつたからである。このことは現在銘記して置くべきことの様に思われる。国にも運命がある。

次にあれほど我国が「執着」した「中国での権益」の喪失の影響はどうであろうか。これは多分に我国の資本主義の成長の度合、科学技術の進歩と関係がある様に思われる。我国は天然資源に乏しい。この条件は今も昔も変わらないうが、その条件下でも我国は貿易立国出来るようになった。技術力が国の在り方まで変えたわけである。「中国での権益」に執着した時期から現在まで六、七十年経過している。経済的側面のみに限ればこの様な形での「中国での権益」からの脱却の仕方もあり得たが、「当時」そこまで見通すべきだつたと考えるのは、後世の傲慢だろう。

先の『アメリカもまた日本と戦った国である』に戻る。我が国が『行くも死、留まるも死』と迄思い詰めたのは、他国に「征服」されることを恐れたためで、別にロシアは困るが、他の国ならば良いというものではない。今次大戦で日本はアメリカに「征服」された。明治開国以来最も恐れていたことが発生したのである。では現状は如何。これも亦、先ほどの「生命線の喪失とその結果」と同様に、「戦前」の予想を越えた現象である。これが「冷戦」の結果であることは周知の通りである。不思議な好運と言わざるを得ない。国にも運命がある。しかしこれは無償で得られたものではない。反語的に云えば征服されまいとして明治以来、営々として続けてきた「努力」の結果が、征服された後になって花開いたのかも知れない。国の運命も端倪すべからざるものがある。

平成五年四月現在、中国の版図は、黒竜江以北、沿海州、外モンゴルを除けば（除く地域が広すぎる？）、康熙、乾隆と併称された清の最盛期に近い。また、十九世紀末から二十世紀当初のようにロシアが「満州」に侵入する可能性はない。十八世紀末の様なエトロフ、クナシリでの日露の「武力衝突」もない。満州に対する日本の「進出」もない。朝鮮半島が戦場になる可能性も現実的に見て低いと思われる（核疑惑はあるが）。長崎水兵事件の再現の可能性もない。過去二百年に及ぶアジア東（北）部の動乱を顧みる時、<sup>うた</sup>転た感慨に堪えない。夫々の時期に、夫々の国々は、やはり、その時点での、現在及び将来（子孫）の国運を賭けて戦った筈ではなかったか。

往事茫々として夢の如しか。歴史の展開の凄味を感じる。

中国四千年の治乱興亡という長期的視野に立ち、我が国のこの期間のこの地域での動きを見れば、五胡十六国の動乱

の時代、北支那を席卷し、短期間に歴史から消えて行つた胡国の一つの様なものかも知れない。この様な見方は、同時に、我国のこの期間のこの地域での「責任」の如何をも含意している。